

安心安全へ理解深める

浜坂東小(新温泉町高末)の5年生10人が、同町対田の農事組合法人「アイガモの谷口」(谷口正友代表理事)でコメ作りを体験した。同法人はアイガモ農法による無農薬栽培に取り組み、田植えや稲刈り体験、同農法に欠かせない食物連鎖も学びながら安心安全なコメ作りへの理解を深めた。また、コメを商品化するまでの話を聞き、ご飯やかも鍋を試食した。

9月26日、稲刈り体験をした。5月の田植えから稲が成長し、手作業の大変さを感じながら稲刈りに挑戦した。

まず、谷口さんから鎌の使い方と稲の刈り方を教わった。鎌を持っていない手で稲の根元を持ち、自分の方向に鎌を引くことで、稲を刈ることができる。みんなで一束一束丁寧に稲を刈っていった。谷口さんによると、稲3束で、飯1杯分のお米がとれるそうだ。児童は「しゃがんで稲を刈るから腰が痛くなっちゃったけれど、たぶん稲を刈れてうれしかった」と話していた。

手と機械の違い実感 効率上がる一方でリスクも

稲刈りを見学した。手作業で稲刈りをするときは、10人で45分間稲を刈っても田んぼ全体の5分の1程度しか刈れなかったが、機械を使用すると短い時間でたくさん刈ることができる。コンバインは収穫と脱穀を同時に行うことができるので、作業効率が上がる。その一方で、機械を使用することで、手作業の時より事故やけがのリスクが高まっている。稲刈りを終えた児童は、「機械で収穫するのは当たり前だと思っていたけれど、実際に稲を刈って手作業の大変さを知った」と話した。

アイガモ農法でコメ作り体験



手作業で田植え

児童らは、田んぼに入り一列に並んで田植えを行った。実際に田植えをしてみると、土が柔らかくて「じつじつ」といって足が抜けにくい。柔らかい土に苦戦しつつも、少しずつ田植えのコツをつかんでいった。手作業で田植えを行うと腰が痛くなったり、泥に足

5月27日、アイガモの谷口さん協力のもと、田植え体験を行った。無農薬のアイガモ農法で安心してコメが作られることを学んだ。

アイガモ農法とは、アイガモを飼育しながらコメ作りを行う有機農法の一つだ。アイガモが雑草や害虫を食べることで、農薬を使用する必要がない。また、アイガモのふんによって栄養の高い土ができる。

児童らは、最後に田植え機に乗せてもらい、手作業との違いを実感した。西垣結斗さんは「機械で田植えができるのも便利だし、うれしうに話していた。谷口さんは「機械を使うことで作業が早くなった。環境に良いことがうれしい」と喜んで



コンバインで脱穀



コンバインで脱穀

店内の商品を見学



11月11日、アイガモの谷口さんでコメを商品化している様子を見学した。

コメを使った商品づくり

消費者に届けるために

コメを消費者に届けるために、機械を使って精米したり、コメを真空パックに入れていた。コメ以外にもみそをついたり、カモ肉をきぼいて商品として届ける準備をしていた。店内には、玄米を使用したアイヌやコメぬかを使用したせんべい、古来米、玄米を使用したポン菓子など、コメを使っている商品がたくさんあった。

アイガモの谷口さんの商品は、地元道の駅で販売されている。谷口さんは「自然循環型農法で環境にやさしいコメ作りをしている。農業は人が生きるためになくてはならないものだ」と話していた。

絶品のかも鍋試食 ご飯もおいしい



絶品のかも鍋コース

コメ作りの締めくくりとして、谷口さんからかも鍋やご飯を振る舞っていただいた。だしの効いた汁に、カモ肉と野菜がたっぷり入ったかも鍋と、無農薬の安心安全でとてもおいしいご飯。「食べる鴨ラー油 おかわりマン!」とご飯を一緒に食べると、あまりのおいしさに箸が止まらない。「アイガモ農法によって消費者に安心安全な食品を届けたい」という谷口さんの思いを感じることができた。

アイガモ農法と生き物

6月27日、対田にある田んぼや川で、アイガモの谷口さんと生き物調査を実施した。農業の使われているアイガモ農法の田んぼには、本当に生き物が多いのかを調査するためだ。

まず、田んぼの周りで夕



「いたいたいた!」と喜ぶ児童

対田の田んぼと川を調査

夕網を使って調査した。田んぼには、ヒルやカエル、クモがおり、児童の一人がとて大きなヒルを捕まえた時には、全員が驚きの声を上げた。

次に川の中に入り、石の下や草むらの中にいる生き物を探した。みんな夢中でガサガサと川の中を探った。川には、タニシやモクズガニ、ドジョウなどがおり、イトトンボやザリガニも発見。多くの生き物たちが、

それぞれの特徴に合った暮らし方をしていた。谷口さんは「川は環境が良ければ、田んぼに生息する生き物の種類も増える」と説明。川と田んぼの環境のバランスが重要だということも学んだ。参加した児童は「いろいろな生き物がいて、見つけるのが楽しかった。どんな生き物がいるのかも調べたい」と話していた。

生き物たちを観察

編集後記

アイガモの谷口さんでお話を聞いて、おコメ以外にもせっけんやポン菓子、玄米スイーツなど、いろいろな物に変身することになりびっくりしました。(西村蘭香)

私は、収穫したおコメを真空パックに入れて消費者に届ける工程が心に残りました。道の駅などでアイガモの谷口さんの商品を探して、良さを家族に伝えたいです。(田中綾花)

僕は、生き物調査で多くの生き物を探まることができました。たくさんの生き物が生息する豊かな環境をこれからも守っていきたく思いました。(中村勇翔)

僕が多くのことを学んだのは、生き物調査です。川と田んぼの生き物たちのつながりを知りました。自由で暮らしやすい生き物が全国に広がってほしいです。(前田清史郎)

アイガモ農法で作られたおコメは、いろんな食べ物や日用品になることを初めて知って驚きました。わたしも、環境に良い商品を使ってみたいと思いました。(田中春)

初めての稲刈りでしたが、谷口さんに教えてもらって上手にできてうれしかったです。コメ作りの大変さが分かり、ご飯を残さず食べようと思いました。(前田和奏)

コメ作りの学習を通して収穫されたおコメがいろいろな商品になっていることに驚きました。せっけんやポン菓子もあり、いろんな商品を作っています。いいなと思いました。(中村泉咲)

アイガモの谷口さんでとれたおコメがたくさんの商品に変身することに驚きました。無農薬で作ったおコメはとってもおいしかったです。(西垣結斗)

僕は、生き物調査でたくさんの生き物を探まることができました。多くの生き物が住む環境を守っていかなくてはならないと思いました。(中村勇翔)

コメの商品化について教えていただいた後、食べさせてもらったアイガモ農法で育ったおコメは、とてもおいしかったです。無農薬で育てる農法が全国に広がってほしいです。(尾崎大誠)



はまさかひがし。 浜坂東小新聞

学校概要

【学校名】新温泉町立浜坂東小学校
【所在地】兵庫県美方郡新温泉町高末3-9
【校長名】山本和正
【児童数】36人
【教育目標】ふるさとを誇りに、共に支え合い、自ら考え行動する児童の育成

沿革

2003年 小学校再編により久斗小と久斗山小が統合。浜坂町立浜坂東小として開校。
04年 赤崎小、御火浦小と統合。
05年 読書活動優秀実践校として、文部科学省表彰を受賞。
24年 地域安全まちづくり活動賞(対田・久谷見守り隊)

1995年度新築の木ぬくもりのある校舎は、地域の社会体育、社会教育活動の場としても活用されている。2022年度学校運営協議会設置校(CS)となり、地域学習などの観点から学校教育活動を推進中。

NIE Newspaper in Education



5年生が作った新聞です